

## 第2章 教師や児童生徒のSNSに関する実態調査の結果と考察

### 1 教師が捉えている児童生徒の姿と人間関係づくりの取組状況

#### (1) 調査の目的

教師が捉えている児童生徒の姿（見方・捉え方）と「豊かな人間関係づくり」の取組状況を把握し、人間関係を豊かにする指導・支援に係る基礎データとする。

#### (2) 教師対象の実態調査の対象・調査内容・調査時期・調査方法等

調査対象	公立の小・中・高等学校，特別支援学校の教諭，養護教諭，管理職
人数	小学生221人，中学生162人，高等学校160人，特別支援学校20人の計563人
調査名	学校生活・インターネット利用・友達関係に関する調査（教師用）
調査内容	今の児童生徒をどのように捉えているのかを「学校生活」，「友達関係」，「SNS利用」についての質問項目と，関係性が豊かになる指導・支援の取組の実態を調べる質問項目で構成
調査時期	平成27年5月～12月
調査方法	生徒指導実践力向上プログラム事業や移動講座，校内研修等の出席者に回答を依頼し，マークシート形式による質問紙調査法で実施

#### (3) 教師対象の実態調査の結果

##### ア 児童生徒の「学校生活」，「友達関係」，「SNS利用」に関する内容

質問項目のリード文は，「あなたが児童生徒と関わる中で思っていること，感じていることについて回答してください。」とし，「とても思う」，「思う」，「あまり思わない」，「思わない」の4件法の選択式で回答を求めた。

##### ア) 児童生徒の「学校生活」に関する内容について

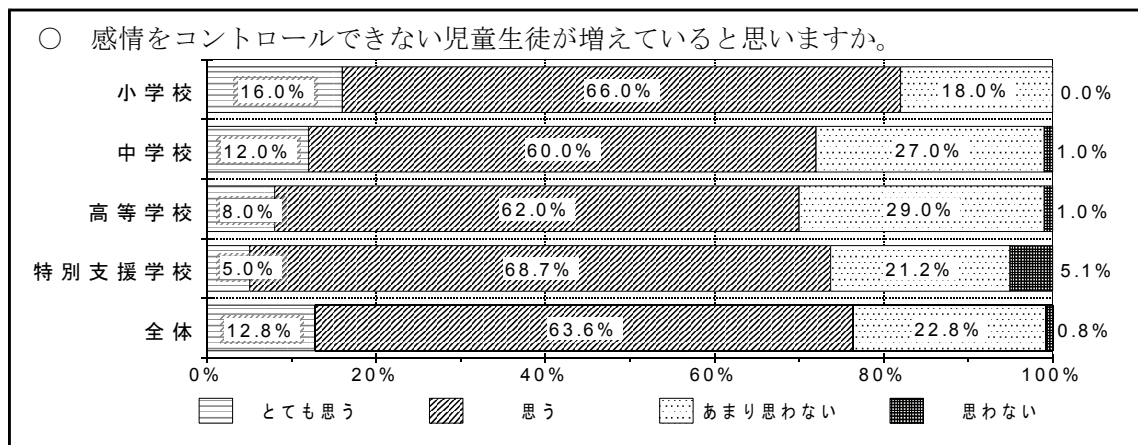


図2-1 教師の捉える児童生徒の感情コントロール

図2-1から，7割以上の教師は，感情をコントロールできない児童生徒が増えていると捉えていることが明らかになった。また，統計処理（一元配置分散分析：三つ以上の標本の平均を比較する分析）による比較分析では，小学校の教師と高等学校の教師の回答には有意な差があり，小学校の教師は高等学校の教師よりも「とても思う」，「思う」と回答している。

このことから，小学校の教師は高等学校の教師よりも感情をコントロールできない児童生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。

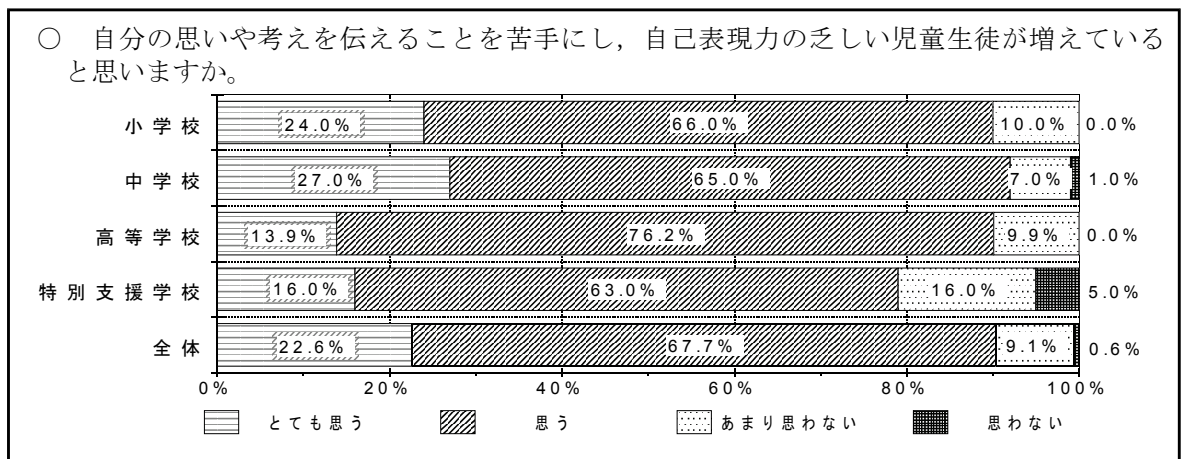


図2-2 教師の捉える児童生徒の自己表現力

図2-2から、9割以上の教師は、自己表現力の乏しい児童生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。「とても思う」、「思う」と回答した割合は、中学校の教師が92.0%と最も多い結果であったが、統計処理の結果、校種間に有意な差はなかった。

以上のことから、教師の多くは「感情のコントロールができない児童生徒」や「自己表現力の乏しい児童生徒」が増えていると捉えていることが明らかとなった。

(イ) 児童生徒の「友達関係」に関する内容について

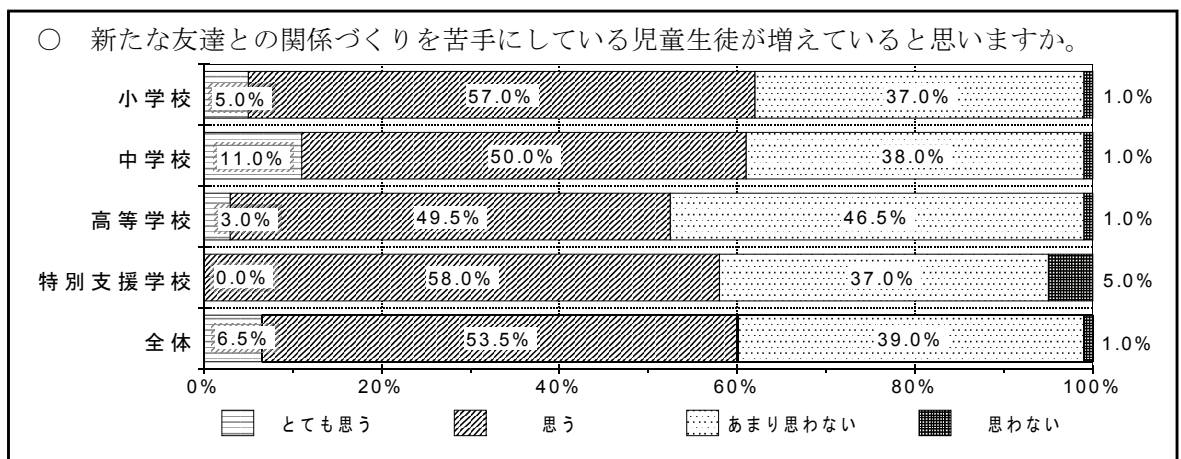


図2-3 教師の捉える児童生徒の新たな友達関係づくり

図2-3から、教師全体の6割は、新しい友達関係を築くことを苦手にする児童生徒が増えていると捉えていることが分かった。「とても思う」、「思う」と回答した割合は、小学校の教師が62.0%と最も多い結果であったが、統計処理の結果、校種間に有意な差はなかった。

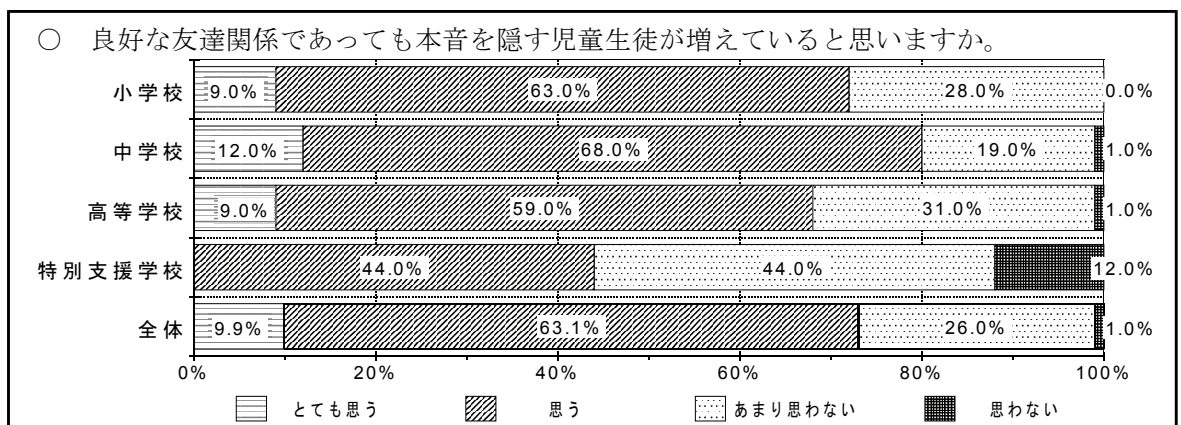


図2-4 教師の捉える児童生徒の自己開示

図2-4から、特別支援学校以外の校種において6割以上の教師は、良好な友達関係であっても本音を隠す児童生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。「とても思う」、「思う」と回答した割合は、中学校の教師が80.0%と最も多い結果であった。統計処理で比較分析をした結果、特別支援学校と小・中・高等学校の間に有意な差があったことから、小・中・高等学校の教師は、特別支援学校の教師よりも本音を隠す児童生徒が増えていると捉えている状況にあることが明らかとなった。

以上のことから、教師の多くは「新しい関係づくりを苦手とし、良好な関係でも本音を隠す児童生徒が増えている。」と捉えていることが明らかとなった。

(ウ) 児童生徒の「SNS利用」に関する内容について

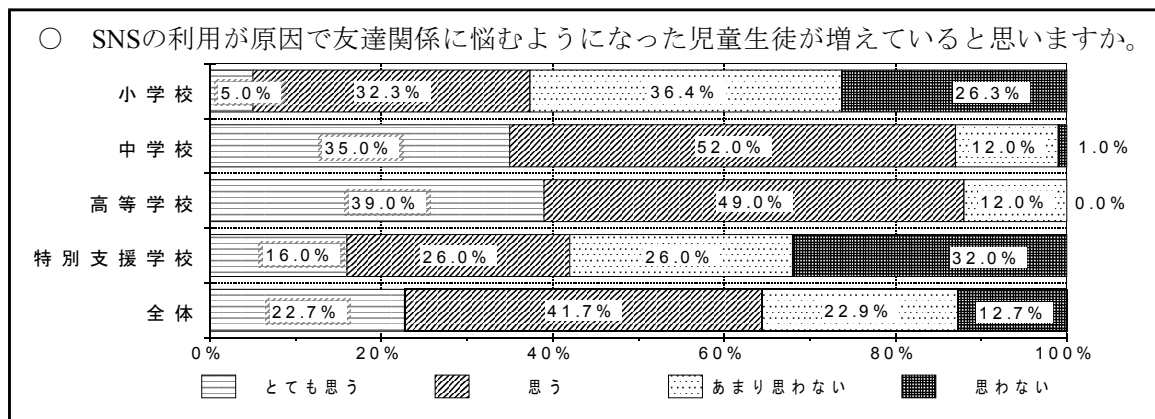


図2-5 教師の捉える児童生徒のSNS利用からの友達関係の悩み

図2-5から、中学校と高等学校の教師の8割以上は、LINEなどのSNSでのやり取りがきっかけで友達関係に悩むようになった生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。また、統計処理による比較分析の結果、「とても思う」、「思う」と回答した小学校・特別支援学校の教師と中学校・高等学校の教師の間に有意な差があったことから、中学校・高等学校の教師は、小学校・特別支援学校の教師より、SNSの利用で友達関係に悩むようになった生徒が増えていると捉えている状況にあることが明らかとなった。

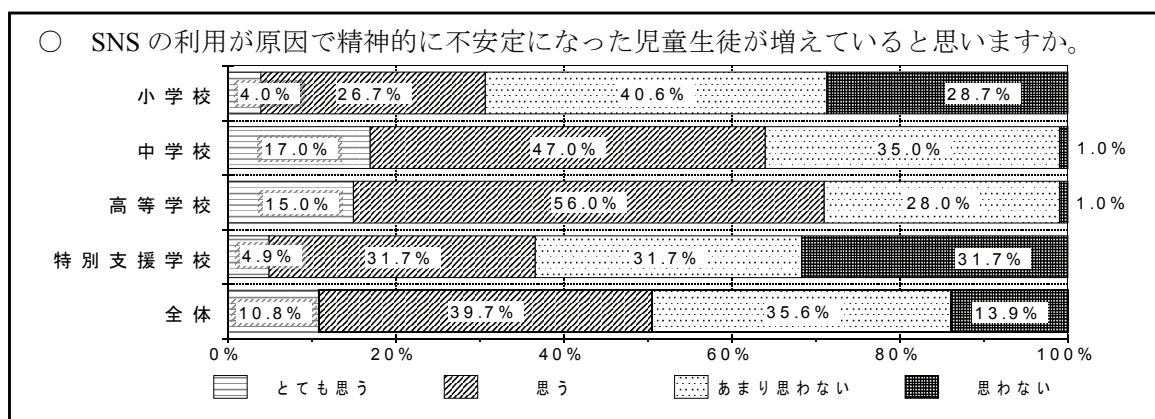


図2-6 教師の捉える児童生徒のSNS利用からの精神的な不安定感

図2-6から中学校と高等学校の教師の6割以上は、SNSの利用が原因で精神的に不安定になった生徒が増えていると捉えていることが明らかとなった。また、統計処理の結果、小学校・特別支援学校と中学校・高等学校の間に有意な差があったことから、中学校・高等学校の教師は、小学校・特別支援学校よりSNSの利用が原因で精神的に不安定になった生徒が増えていると捉えている状況が明らかとなった。

以上のことから、中学校・高等学校の教師は「SNSでのやり取りで友達関係に悩み、精神的に不安定になる生徒が増えている。」と捉えていることが明らかとなった。

イ 関係性が豊かになる指導・支援の取組の実態に関する内容

質問項目のリード文は、「年間計画、体験活動、『学校楽しいーと』の取組について回答してください。」とし、4件法の選択式で回答を求めた。

(7) 体験活動の取組の実態について

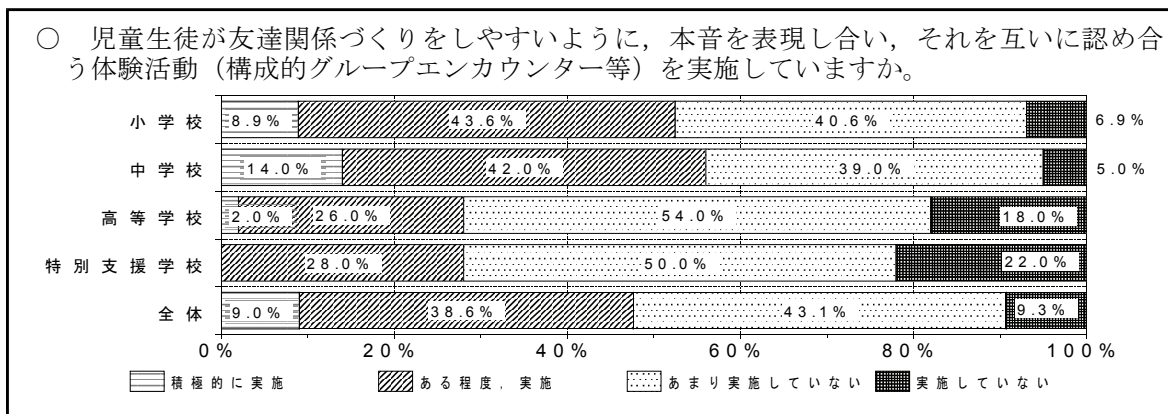


図2-7 教師の体験活動の取組の実態

図2-7から、児童生徒の友達関係づくりを促す体験活動を実施している教師については、小学校が52.5%、中学校が56.0%、高等学校が28.0%、特別支援学校が28.0%であった。統計処理で比較分析をした結果、小学校・中学校と高等学校・特別支援学校の教師の間に有意な差があったことから、高等学校・特別支援学校の教師は小学校・中学校の教師に比べて児童生徒の交友関係を促す体験活動を実施していないと回答していることが明らかとなった。

(4) 友達関係づくりに関する年間計画の作成状況について

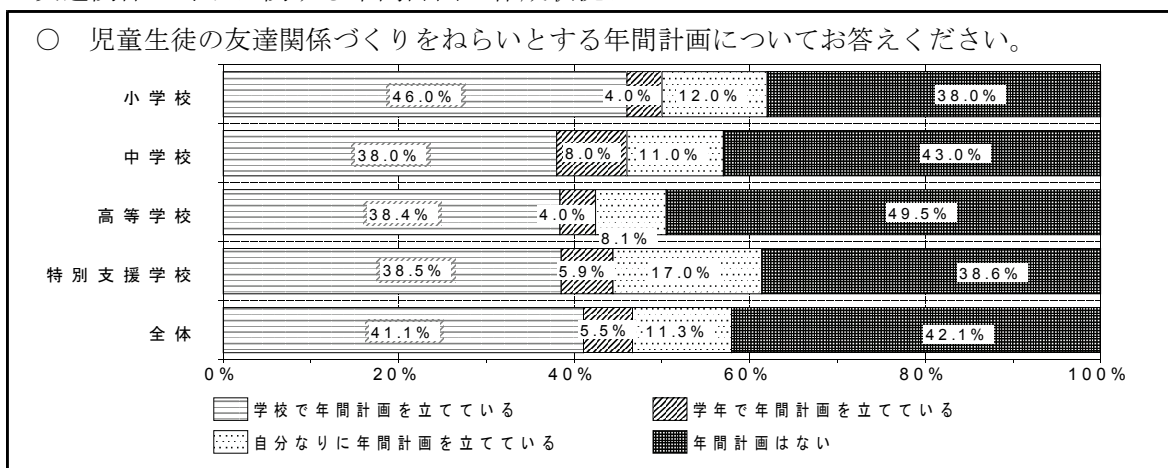


図2-8 友達関係づくりに関する年間計画の作成状況

図2-8から、児童生徒の友達関係づくりをねらいとする「年間計画はない。」と回答する教師が全体では4割を超えていた。統計処理をした結果、高等学校の教師の約半数は「年間計画はない。」と回答している状況にあり、小学校の教師との回答に有意な差があることが明らかとなった。

このことから、多くの教師は児童生徒の人間関係づくりの課題を認識して指導・支援の重要性を理解しているが、友達関係づくりを促す取組状況については、「計画的に実施していない。」と回答する教師が少なくない実態であることが明らかとなった。

## 2 児童生徒のSNS利用実態と学校適応感・友人関係との関連性の実態

### (1) 調査の目的

児童生徒のSNS利用（テキストチャットによるメッセージのやり取り）の実態と学校適応感、友人関係との関連性を把握し、人間関係を豊かにする指導・支援に係る基礎データとする。

### (2) 児童生徒対象の実態調査の方法等

調査人数	小学6年生698人，中学2年生655人，高校1年生480人，高校2年生474人の計2,307人
調査名	学校生活・インターネット利用・友達関係に関する調査
調査内容	学校適応感を調べる「学校楽しいーと」の質問項目に，SNS（テキストチャットによるメッセージのやり取り）の利用実態やルール意識・負担感などの質問項目と，児童生徒の友人関係の内容の質問項目を合わせて構成
調査時期	平成27年6～12月
調査方法	1 小学校は12学級以上，中学校は6学級以上を基準に，各教育事務所管轄ごとに各1校，鹿児島市教育委員会管轄から2校を抽出して実施した。 2 高等学校は，鹿児島市内から2校，それ以外から1校を当課で抽出し，普通科高校3校，専門高校4校の7校で実施した。 3 教師対象の調査と同様，マークシート形式による質問紙調査法で実施し，質問紙は当課で回収して集約した。

### (3) 児童生徒対象の実態調査の結果

#### ア 児童生徒のSNSの利用の実態

表2-1から，高校生のほとんどはSNSを利用しており，小学校6年生においても約半数はSNSを利用している実態があることが明らかになった。

表2-1 児童生徒のSNS利用の実態

校種・学年	小学6年生	中学2年生	高校1年生	高校2年生
SNSを利用する	333 ( 47.7%)	412 ( 62.9%)	460 ( 95.8%)	459 ( 96.8%)
SNSを利用しない	365 ( 52.3%)	243 ( 37.1%)	20 ( 4.2%)	15 ( 3.2%)
合計	698	655	480	474

単位：人

#### イ 1週間当たりのSNSの利用日数

図2-9から，学年が上がるにつれて毎日利用している割合が多くなっていることが明らかになった。高校2年生においては，高校1年生に比べて毎日利用している割合は少ないが，週に3～4日の利用，1～2日の利用，月に数回の利用の割合が多くなっている実態がある。

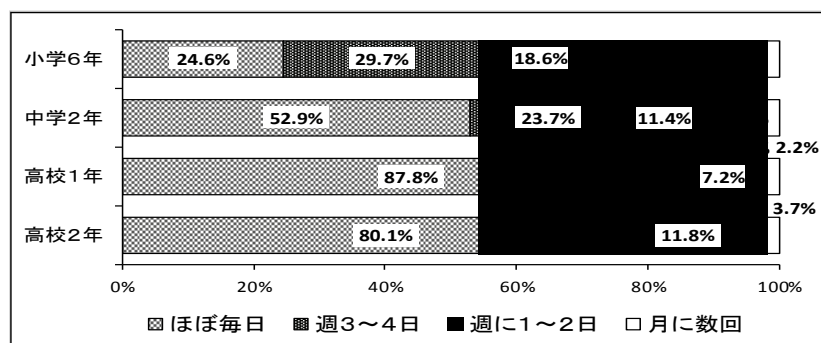


図2-9 各学年の1週間当たりのSNSの利用日数

ウ 平日にSNSを利用する時間

図2-10から、学年が上がるにつれて、2時間以上の利用の割合は多くなる傾向にあることが明らかになった。高校1・2年生においては、半数以上が1時間以上の利用時間の割合となっており、特に小学6年生から中学2年生にかけては大幅に利用時間が増える傾向にある。

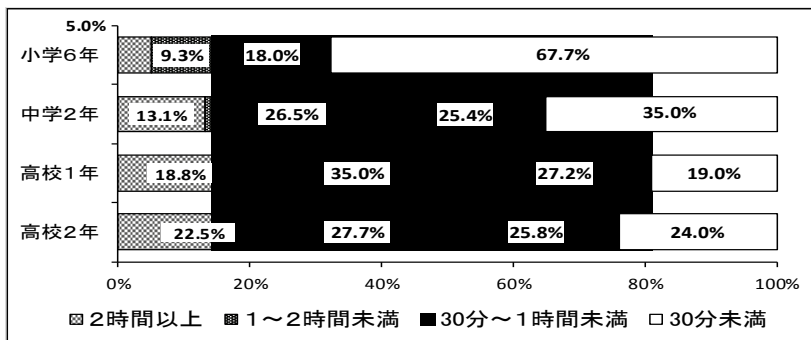


図2-10 各学年の平日にSNSを利用する時間

エ SNS利用の経験年月

図2-11から、全学年において1年以上の利用の割合が5割を超えていることが明らかになった。また、小学6年生や中学2年生の結果から、高校1・2年生よりも早くからSNSを利用し始めている児童生徒が多い実態があり、SNS利用の低年齢化が進んでいると読み取れる。

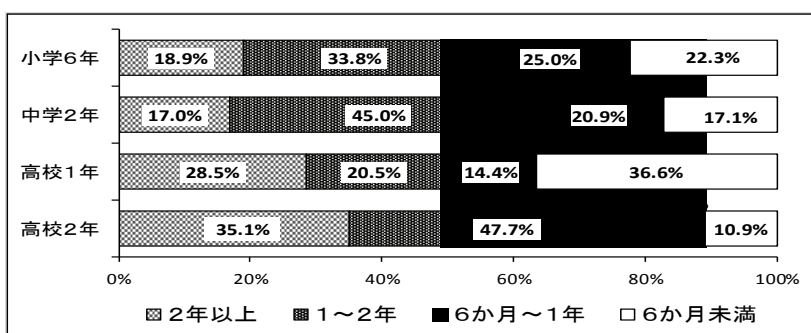


図2-11 各学年のSNS利用の経験年月

オ SNSでやり取りをする友達の人数

図2-12から、小学6年生から高校1年生は学年が上がるにつれ、人数が増える傾向がみられることが明らかになった。11人以上の友達とやり取りをする割合は、小学6年生では18.5%であるが、中学2年生は31.0%と高くなっている。

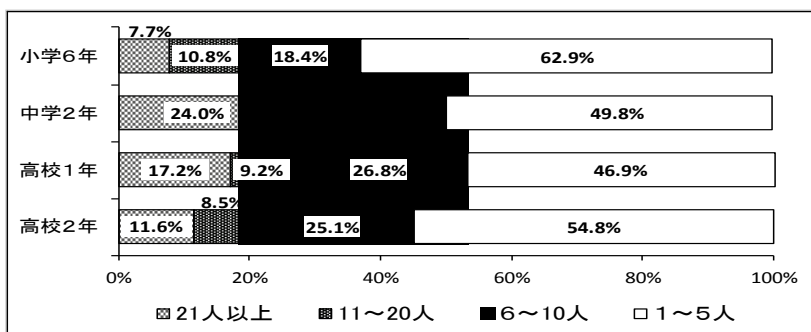


図2-12 各学年のSNSでやり取りをする友達の人数

カ SNSのやり取りをするグループ数

図2-13から、学年が上がるにつれ、グループ数が多くなる傾向にあることが明らかになった。グループ数が11以上の割合は、中学2年生から高校1年生にかけて最も増える傾向にある。

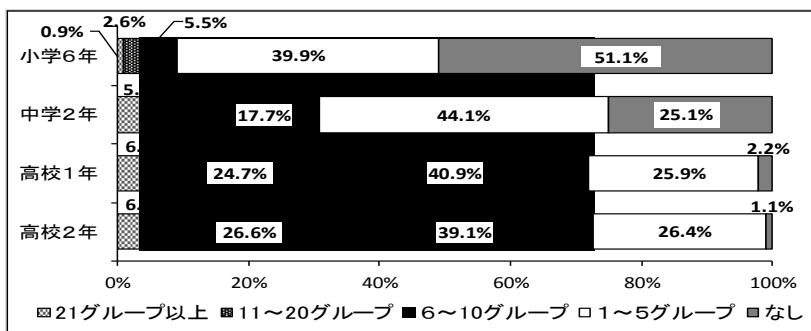


図2-13 各学年のSNSのやり取りをするグループ数



(4) SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の比較分析

学年ごとに「SNSを利用するグループ」と「SNSを利用しないグループ」に分けて、学校適応感を調べる「学校楽しいと」の友人関係<sup>\*1</sup>に関わる4観点、そして、休み時間や昼休みに関する質問の回答を統計処理（t検定）で比較分析した。

ア 「学校楽しいと」の4観点の比較

表2-2 SNSを利用する児童生徒としない児童生徒の「学校楽しいと」4観点の平均値と比較分析の結果

	友達との関係					学級集団における適応感					
	SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定	SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
小6	13.21	2.28	13.52	2.29		小6	13.04	2.37	12.97	2.17	
中2	12.55	2.18	12.96	2.08	*	中2	12.08	2.64	12.31	2.37	
高1	10.67	2.19	12.62	1.86	***	高1	10.40	2.72	12.15	2.13	**
高2	10.11	2.33	12.61	1.97	***	高2	10.56	2.31	12.44	2.27	**
	自己肯定感					心身の状態					
	SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定	SNSを利用しない		SNSを利用する		t検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
小6	11.01	2.42	11.20	2.34		小6	10.84	2.96	10.48	2.95	
中2	10.63	2.50	10.61	2.19		中2	10.67	2.82	10.08	2.96	*
高1	9.53	2.45	10.60	1.92	*	高1	10.47	2.36	9.92	2.61	
高2	9.95	2.25	10.56	1.92		高2	9.89	2.11	10.05	2.68	

・ 最大値は16で、数値が高いほど良好であることを示す。  
 ・ t検定の\*は5%水準、\*\*は1%水準、\*\*\*は0.1%水準で有意な差があることを示す。

各観点の平均値をt検定で比較分析をした結果、表2-2に示すように、小学校では「SNSを利用するグループ」と「SNSを利用しないグループ」の間に有意な差はなかったが、中学2年生では2観点、高校1年生では3観点、高校2年生では2観点で有意な差があった。観点別に有意な差があった学年を整理すると以下ようになる。

- **友達との関係**  
SNSを利用する中学2年生、高校1・2年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が高い。
- **学級集団における適応感**  
SNSを利用する高校1・2年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が高い。
- **自己肯定感**  
SNSを利用する高校1年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が高い。
- **心身の状態**  
SNSを利用する中学2年生は、SNSを利用しない生徒よりも有意に平均値が低い。

このことから、SNSを利用する生徒と利用しない生徒では、観点の平均値で差が見られる傾向があり、SNSを利用する生徒は、SNSを利用しない生徒よりも「友達との関係」や「学級集団における適応感」は、良好であることが明らかになった。

\*1 4観点とは、「学校楽しいと」における学校適応感を調べるための6観点から「教師との関係」、「学習意欲」を除く、「友達との関係」、「学級集団における適応感」、「自己肯定感」、「心身の状態」の観点。

イ 「学校楽しいと」の下位項目の比較

表2-3 SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の「学校楽しいと」4観点の下位項目の平均値と比較分析の結果

「友達との関係」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
学校には、気軽に話せる友達がいる。	小6	3.53	0.60	3.60	0.55	
	中2	3.46	0.62	3.49	0.57	
	高1	3.00	0.49	3.42	0.60	**
	高2	2.85	0.54	3.40	0.55	***
学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。	小6	3.35	0.67	3.41	0.68	
	中2	3.23	0.64	3.29	0.63	
	高1	2.73	0.80	3.20	0.61	**
	高2	2.70	0.70	3.20	0.57	***
学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。	小6	3.15	0.73	3.25	0.73	
	中2	2.82	0.72	2.98	0.67	
	高1	2.36	0.81	2.91	0.68	**
	高2	2.11	0.75	2.85	0.62	***
自分が困っているときに助けられたり、協力してくれたりする友達がいる。	小6	3.24	0.69	3.34	0.65	*
	中2	3.12	0.62	3.23	0.63	*
	高1	2.73	0.69	3.12	0.54	**
	高2	2.50	0.59	3.14	0.53	**

「心身の状態」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
落ち込むことがある。	小6	2.50	0.86	2.48	0.86	
	中2	2.44	0.79	2.32	0.86	
	高1	2.47	0.70	2.22	0.80	
	高2	2.20	0.83	2.26	0.74	
おなかが痛くなったり、下痢をしたりする。	小6	2.90	0.92	2.84	0.87	
	中2	2.89	0.87	2.77	0.92	
	高1	2.87	0.76	2.66	0.90	
	高2	2.55	0.83	2.70	0.85	
頭が痛くなるときがある。	小6	2.70	1.00	2.53	1.00	*
	中2	2.60	0.98	2.44	1.01	
	高1	2.67	0.83	2.42	0.96	
	高2	2.45	1.11	2.46	0.94	
気分が悪くなることがある。	小6	2.83	0.94	2.70	0.97	
	中2	2.83	0.89	2.61	0.93	**
	高1	2.64	0.75	2.67	0.85	
	高2	2.68	0.75	2.63	0.85	

「学級集団における適応感」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
学級の中にいると、明るく楽しい気持ちになる。	小6	3.33	0.68	3.37	0.65	
	中2	3.11	0.75	3.24	0.71	*
	高1	2.80	0.57	3.11	0.69	
	高2	2.70	0.78	3.13	0.63	**
学級の人々と一緒に学校行事に参加したり、活動したりするのは楽しい。	小6	3.45	0.66	3.43	0.69	
	中2	3.23	0.78	3.33	0.73	
	高1	2.87	0.64	3.31	0.68	*
	高2	2.75	0.64	3.35	0.63	***
この学級の一員でよかったと思うことがある。	小6	3.22	0.74	3.23	0.72	
	中2	2.99	0.74	3.03	0.75	
	高1	2.71	0.81	3.06	0.73	
	高2	2.74	0.73	3.12	0.70	*
学級は、目標やルールが大切にされているので、安心して居心地よく過ごせる。	小6	3.09	0.73	2.99	0.66	
	中2	2.85	0.68	2.79	0.66	
	高1	2.50	0.77	2.77	0.64	
	高2	2.53	0.76	2.85	0.62	*

「自己肯定感」の下位項目	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
委員会活動や係(当番)活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。	小6	2.83	0.78	2.87	0.74	
	中2	2.69	0.83	2.59	0.77	
	高1	2.40	0.75	2.62	0.72	
	高2	2.40	0.99	2.65	0.67	
学校行事の計画や準備をやり遂げたとき、「よくがんばったなあ」「よくやったなあ」と思うことがある。	小6	3.10	0.62	3.06	0.61	
	中2	2.90	0.73	2.76	0.65	**
	高1	2.50	0.69	2.75	0.61	
	高2	2.73	0.80	2.67	0.58	
自分には、自分なりのよいところがあると思う。	小6	2.70	1.00	2.53	1.00	*
	中2	2.60	0.98	2.44	1.01	
	高1	2.45	0.83	2.46	0.96	
	高2	2.67	1.11	2.42	0.94	
他人から好かれている方だと思う。	小6	3.24	0.69	3.34	0.65	*
	中2	3.12	0.62	3.23	0.63	*
	高1	2.50	0.69	3.14	0.54	**
	高2	2.73	0.59	3.12	0.53	**

・ 最大値は4で、数値が高いほど良好であることを示す。  
 ・ t検定の\*は5%水準、\*\*は1%水準、\*\*\*は0.1%水準を示す。

「友達との関係」、「学級集団における適応感」、「心身の状態」、「自己肯定感」の4観点の下位項目を統計処理(t検定)で比較分析した結果、表2-3が示すように、小学6年生では2項目、中学2年生では3項目、高校1年生では5項目、高校2年生では8項目で有意な差があることが明らかになった。

このことについて、SNSを利用する児童生徒としない児童生徒の傾向と関係づくりの傾向・特徴と指導・支援の留意点をまとめたものが表2-4である。

表2-4 SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の傾向・特徴と指導・支援の留意点

下位項目	結果の傾向と特徴	指導・支援の留意点
友達との関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 高校1・2年生でSNSを利用する生徒は、SNSを利用しない生徒よりも「気軽に話せる友達がいる。」「遊びに誘ってくれる友達がいる。」「本当の気持ちを話せる友達がいる。」と回答している。</li> <li>○ 小学6年生、中学2年生、高校1・2年生のSNSを利用する児童生徒は、SNSを利用しない児童生徒よりも、「困っている時に助けてくれる友達がいる。」と回答している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SNSを利用しない高校1・2年生は、気軽に話し掛けてくれる友達や本当の気持ちを話す友達がいないといった悩みを抱えやすいので、自ら友達と会話をしたり、一緒に活動できたりするような指導・支援の必要がある。</li> <li>○ SNSを利用しない児童生徒は、困っているときに助けを求めることができずに悩みやすいため、誰にでも分け隔てなく気軽に助けを求めることができるように指導・支援をする必要がある。</li> </ul>



下位項目	結果の傾向と特徴	指導・支援の留意点
心身の状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小学6年生のSNSを利用する児童の多くが「頭が痛くなるときがある。」と回答している。</li> <li>○ 中学2年生のSNSを利用する生徒の多くが「気分が悪くなることもある。」と回答している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SNSを利用する児童生徒は、SNSを利用する友達との関係性の悩みが心身に表れていると考えられるため、友達に自分の考えや気持ちを伝えたり、友達とうまくいかなかったときに友達との関係をよくしたりすることができるような指導・支援が必要である。</li> </ul>
学級集団における適応感	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SNSを利用する中学2年生と高校2年生は、利用しない生徒よりも「学級の中にいると楽しい気持ちになる。」と回答している。</li> <li>○ 高校1・2年生のSNSを利用する生徒の多くは、「学級のみなどと活動するのは楽しい。」と回答している。</li> <li>○ 高校2年生のSNSを利用する生徒は、利用しない生徒よりも「この学級の一員でよかったと思う。」「学級は安心して居心地よく過ごせる。」と回答している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SNSを利用しない生徒は、学級にいても孤独感を感じやすいと考えられるため、自分から友達をつくることのできるよう、関係づくりを促す指導・支援をする必要がある。</li> <li>○ SNSを利用しない生徒は、クラスの所属感が低く、居心地がよくないために不安な気持ちになりやすいと考えられる。所属感を高めるためにも、学級で決めたことを守って活動できるようになったり、あまり話をしたくない友達とも一緒に活動ができるようになったりする指導・支援が必要である。</li> </ul>
自己肯定感	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 中学2年生のSNSを利用しない生徒は、利用する生徒よりも「よくがんばった。」「よくやった。」と回答している。</li> <li>○ 小学6年生のSNSを利用しない児童は、利用する児童よりも「自分にはよいところがある。」と回答している。</li> <li>○ 小学6年生、中学2年生、高校1・2年生のSNSを利用する児童生徒は、SNSを利用しない児童生徒よりも、「他人から好かれていると思う。」と回答している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SNSを利用する生徒は、達成感を実感できる場面が少ないと考えられるため、努力していることを認める指導・支援が必要である。</li> <li>○ SNSを利用する児童は、自分のよさが分からないことで悩みやすいと考えられるため、自分の良さに気付くことのできる指導・支援が必要である。</li> <li>○ SNSを利用しない児童生徒は、「みんなから好かれているとは思わない。」という自己嫌悪感を抱きやすいため、自分の思いや考えを伝えられる場面を設定し、友達からの承認を実感できるように指導・支援が必要である。</li> </ul>

ウ 休み時間や昼休みに関する質問の回答比較

表2-5 SNSを利用する児童生徒と利用しない児童生徒の休み時間や昼休みに関する質問項目の平均値とt検定の結果

休み時間や昼休みの「友達との過ごし方」	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
	小6	3.63	0.60	3.73	0.57	*
休み時間や昼休みに友達と一緒に会話をしたり、遊んだりしている。	中2	3.49	0.75	3.63	0.62	*
	高1	2.58	0.77	3.54	0.62	***
	高2	2.69	0.95	3.49	0.60	*
よくある=4 ある=3 あまりない=2 全くない=1						
休み時間や昼休みの「楽しさ」	SNSを利用しない		SNSを利用する		t 検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
	小6	3.66	0.58	3.69	0.61	
休み時間や昼休みの時間は楽しい。	中2	3.47	0.72	3.56	0.66	
	高1	2.84	0.69	3.46	0.63	**
	高2	2.79	0.95	3.35	0.66	**
とても楽しい=4 楽しい=3 あまり楽しくない=2 全く楽しくない=1						
・ t 値は比較分析の検定統計値、検定の*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準を示す。						

休み時間や昼休みの内容については、「友達との過ごし方」と「楽しさ」に関する質問内容で実施し、選択式回答を数値化して平均値を算出した。表2-5は、平均値を統計処理（t検定）による比較分析をした結果である。

SNSを利用する児童生徒はSNSを利用しない児童生徒より、「休み時間や昼休みに友達と一緒に会話をしたり、遊んだりしている。」「休み時間や昼休みは楽しい。」と回答している児童生徒が多いことが明らかになった。このことから、休み時間や昼休みは、SNSを利用する児童生徒は楽しく過ごせる時間となっているが、SNSを利用しない児童生徒は、会話がしにくい、遊びにくい、楽しくないと感じている傾向が読み取れ、「学校楽しいーと」の「友達の関係」や「学級における適応感」の平均値が低くなる関連性も考察される。したがって、SNSを利用しない児童生徒の指導・支援においては、特に、休み時間や昼休みにSNSを利用する児童生徒と積極的に一緒に活動できる行動力を高める指導・支援が必要になると考えられる。

(5) SNSを利用する児童生徒の傾向と特徴の分析

SNSを利用する児童生徒の傾向と特徴を把握するために、「メッセージのやり取りをするときに気を付けていること」、「メッセージのやり取りをしてつながりや親しみを感じる事」、「メッセージのやり取りをして悩みや負担に感じる事」の3点から構成した質問項目で実態調査を実施した。また、児童生徒のSNSに対する意識を観点別に分析するために、これらの質問項目の回答を統計処理（因子分析）して、SNS観点を次に示す五つに整理した。

- メッセージのやり取りをするときに気を付けていること
  - ⇒ SNS観点：「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識（4項目）
  - ⇒ SNS観点：「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識（2項目）
- メッセージのやり取りをしてつながりや親しみを感じる事
  - ⇒ SNS観点：「SNS利用のやり取り」の親和性（3項目）
- メッセージのやり取りをして悩みや負担に感じる事
  - ⇒ SNS観点：「即レス（メッセージを受信後、即座に返信すること）」の悩み・負担感（2項目）
  - ⇒ SNS観点：「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感（4項目）

ア SNS観点の学年間の特徴と指導・支援の留意点

各学年の特徴を捉えるために、五つの観点と下位項目の平均値を統計処理（一元配置分散分析）し、学年比較をした結果、以下に示す特徴と指導・支援の留意点が明らかになった。

(ア) 『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識』の学年間比較

表2-6 「『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」の平均値と比較分析の結果

	平均値	標準偏差	F値	有意差のある関係
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	小6	13.67	2.57	6.73 *** 小6 > 中2・高1・高2
	中2	12.82	2.54	
	高1	12.50	2.08	
	高2	12.64	6.14	
・ 最大値は16で、数値が高いほど「気を付けている」状態、低いほど「気を付けていない状態」であることを示す。				
下位項目	平均値	標準偏差	F値	有意差のある関係
住所や電話番号、メールアドレス、顔が写っている写真のことなどの情報は出さないようにしている。	小6	3.64	0.69	30.76 *** 小6 > 中2・高1・高2
	中2	3.40	0.79	
	高1	3.26	0.73	
	高2	3.16	0.68	

とても気を付けている=4 気も付けている=3 あまり気をつけていない=2 全く気をつけていない=1

相手が不愉快な気持ちになるような内容は書かないように気を付けている。	小6	3.71	0.61	11.68	***	小6・中2>高1・高2
	中2	3.59	0.69			
	高1	3.52	0.57			
	高2	3.45	0.59			
メッセージを送る前に問題がないか確認をするように気を付けている。	小6	3.30	0.92	0.78		
	中2	3.15	0.87			
	高1	3.15	0.82			
	高2	3.24	2.74			
長時間にならないようにメッセージのやり取りをする。	小6	3.23	0.92	6.27	***	小6>中2・高1・高2
	中2	2.74	0.96			
	高1	2.64	0.84			
	高2	2.84	3.41			

とても気を付けている=4 気も付けている=3 あまり気をつけていない=2 全く気をつけていない=1

- 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「気を付けている」、低いほど「気をつけていない」回答を示す。
- F値は分散分析の検定統計値、\*\*\*は0.1%の有意水準を示す。

『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」の観点、SNSのやり取りで相手との関係性が悪化しないように、相手の立場を気遣ってトラブルを起こさないように注意する意識である。このような意識が低いと他者への配慮が不足し、誤解するメッセージを送ってしまったり、不快な感情につながるやり取りをしてしまったりしてトラブルに発展することも考えられる。

この観点は、4項目の下位項目から構成され、学年比較の結果、表2-6に示すように、小学6年生の平均値は高く、学年が上がるごとに低下している。このことから、SNSのトラブルへの注意力は学年が上がるにつれて低下する傾向にあることが分かった。下位項目では、「メッセージを送る前に問題がないか確認をするように気を付けている」の項目に学年間の差はなく、平均値からメッセージの送信前に確認をしている児童生徒は多いことが明らかになった。しかし、他の3項目については学年間に有意な差があり、中・高校生は、個人情報流しやすい、不快な感情にならないように気を付けない、長時間やり取りをするといった傾向にある。これらから、『SNSをめぐるトラブル』への備えの意識」が低い児童生徒は、SNSを利用する相手のことを考えずにやり取りをし、それがトラブルにつながりやすいと推察される。そのため、このような児童生徒の指導に当たっては、相手の立場に立って考えられるように他者理解を深める指導・支援が必要であると考えられる。

(イ) 『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の学年間比較

表2-7 『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の平均値と比較分析の結果

「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識		平均値	標準偏差	F値	有意差のある関係	
	小6	5.01	2.03	10.20	***	小6・中2>高1・高2
	中2	4.71	1.80			
	高1	4.45	1.58			
	高2	4.41	1.40			
・ 最大値は8で、数値が高いほど「気を付けている」状態であることを示す。						
下位項目		平均値	標準偏差	F値	有意差のある関係	
メッセージのやり取りで嫌な気持ちになったときは、直接、会話を気持ち伝えるように気を付けている。	小6	2.61	1.12	1.81		
	中2	2.62	1.02			
	高1	2.50	0.90			
	高2	2.50	0.84			
友達とのやり取りで困ったときは親や先生に相談するようにしている。	小6	2.46	1.15	21.25	***	小6>中2・高1・高2 中2>高2
	中2	2.11	1.10			
	高1	1.96	0.94			
	高2	1.92	0.88			

とても気を付けている=4 気も付けている=3 あまり気をつけていない=2 全く気をつけていない=1

- 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「気を付けている」、低いほど「気をつけていない」回答を示す。
- F値は分散分析の検定統計値、\*\*\*は0.1%の有意水準を示す。

『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の観点は、SNSでのトラブルが発生した際に、直接、気持ちを伝えたり、親や教師に相談したりして対応しようとする意識である。この意識が低いと、トラブルが発生した時に不快な感情を友達に伝えられなかったり、保護者や教師に悩みを伝えられなかったりすると考えられる。

この観点は、2項目の下位項目から構成され、学年比較の結果、表2-7に示すように、メッセージのやり取りで嫌な気持ちになったとき、直接、会話で気持ちを伝える児童生徒は、全ての学年において、平均値が約2.5の値であったことから、自分の考えや気持ちを伝えることを苦手とする児童生徒が多いことが伺える。また、友達とのやり取りで困ったときに「親や先生に相談するようにしている。」の値は、学年が上がるごとに低下する傾向が見られた。これらから、『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の低い児童生徒は、メッセージのやり取りで嫌な気持ちになった際、相手に自分の考えや気持ちを伝えず、また、保護者や教師に相談せずに対処しようと推察される。そのため、このような児童生徒の指導に当たっては、友達や保護者、教師に自分の考えや気持ちを伝えようとする力を高めたり、友達の意見と違って自分の意見を伝えることができるコミュニケーション力を高めたりする指導・支援が必要であると考えられる。

(ウ) 『SNSのやり取り』の親和性」の学年間比較

表2-8 『SNSのやり取り』の親和性」の平均値と比較分析の結果

	平均値	標準偏差	F値	有意差のある関係
「SNSのやり取り」の親和性	小6	6.69	2.62	2.45
	中2	6.80	2.35	
	高1	6.58	1.93	
	高2	6.95	1.74	
・ 最大値は12で、数値が高いほど「思わない」状態であることを示す。				
下位項目	平均値	標準偏差	F値	有意差のある関係
友達とメッセージのやり取りを通じて、友達の気持ちを確かめることができる。	小6	2.15	0.95	2.30
	中2	2.20	0.90	
	高1	2.17	0.74	
	高2	2.21	0.72	
友達とメッセージのやり取りをすることで、友達とのつながりをもてる。	小6	2.07	0.95	1.32
	中2	2.04	0.90	
	高1	1.97	0.73	
	高2	2.07	0.70	
友達とメッセージのやり取りをして寂しさをすぐにまぎらわすことができる。	小6	2.50	1.09	2.56
	中2	2.59	1.00	
	高1	2.45	0.88	
	高2	2.59	0.79	
とても思う=4 思う=3 あまり思わない=2 全く思わない=1				
・ 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「思わない」、低いほど「思う」回答を示す。				
・ F値は分散分析の検定統計値を示す。				

表2-8からは、『SNSのやり取り』の親和性」の観点は、SNSでやり取りをすることで「友達との関係がより親密になる。」「つながっている感覚がして寂しさを感じない。」といった価値観から、SNSを利用することで互いの気持ちの理解は深まり、友達との関係はより親密になるといった意識である。この観点の意識が高いと、SNSのやり取りに夢中になったり、常につながっていたいという親和性を求めるようになっていたりする状態や、SNSのグループのメンバーとは関係を深められるが、グループ以外とは深く関わり合えないため、狭い人間関

係になってしまうことが懸念される。この観点は、3項目の下位項目から構成され、学年比較の結果、表2-8に示すように、全ての項目において有意な差は見られないことが明らかになった。また、各項目の平均値が全学年において3以下の値になっていることから、「友達の気持ちを確かめることができる。」、「つながりをもてる。」、「寂しさを紛らわすことができる。」と回答する児童生徒が多い傾向にあり、SNSのよさを実感する児童生徒の心理状態が示されているものと考えられる。これらから、SNSを利用する児童生徒はSNSを利用する友達間において親和性を高めていることが推察されるが、SNSでやり取りをしない友達とは親和性を高めにくいといった意識をもっていることも推察される。そのため、『『SNSのやり取り』の親和性』の意識が高い児童生徒の指導に当たっては、SNSでやり取りをしない友達とも関係づくりが深められるように交流する実践力を高める指導・支援が必要であると考えられる。

(エ) 『即レス』の悩み・負担感の学年間比較

表2-9 『即レス』の悩み・負担感の平均値と比較分析の結果

	平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係
「即レス」の悩み・負担感	小6	5.13	2.73	6.60 *** 高1・高2 > 小6
	中2	5.49	1.98	
	高1	5.69	1.54	
	高2	5.68	1.47	
・ 最大値は8で、数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。				
下位項目	平均値	標準偏差	F 値	有意差のある関係
メッセージがきたらすぐに返事をする ことで悩んでいる。	小6	2.60	1.10	8.67 *** 高1・高2 > 小6
	中2	2.77	1.01	
	高1	2.90	0.84	
	高2	2.91	0.81	
友達から送られてくるメッセージを チェックすることで悩んでいる。	小6	2.57	2.03	2.28
	中2	2.71	1.10	
	高1	2.79	0.87	
	高2	2.77	0.83	
とでもあてはまる=4 あてはまる=3 あまりあてはまらない=2 全くあてはまらない=1				
・ 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「あてはまらない」、低いほど「あてはまる」回答を示す。				
・ F値は分散分析の検定統計値、***は0.1%の有意水準を示す。				

「即レス」とは、メッセージを受信後に即座に返信（レスポンス）することを意味する。『『即レス』の悩み・負担感』の観点は、「すぐに返事することに負担感を感じている。」、「メッセージのチェックをしないと『未読無視（メッセージを読まないで無視をする）』と思われる。」といった、SNSでやり取りをする相手が不快な感情にならないよう、すぐに返信をしなければならないといった強迫的な観念があるため、チェックや返信が気になって苦しみ悩んでいる意識の高さである。この意識の背景には、関係性を良好なまま維持したいという願いがあり、この願いが強いほど精神的に疲弊する状態にあることが推測される。

この観点は、2項目の下位項目から構成され、学年間の比較をした結果、表2-9に示すように、小学6年生は『『即レス』の悩み・負担感』を強く感じる傾向があることが明らかになった。また、全ての校種において、各項目の平均値が3以下の結果になっていることから、「悩み・負担感を感じる」と回答する児童生徒は少なくない実態であると推察される。そのため、このような児童生徒の指導に当たっては、SNSのやり取りの悩みや負担感を伝え合えるコミュニケーション力や、友達とのよりよい関係を自ら築いていく行動力を高める指導・支援が必要であると考えられる。

(オ) 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の学年間比較

表2-10 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の平均値と比較分析の結果

	平均値		標準偏差	F値	有意差のある関係
	小6	中2			
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	小6	12.12	3.15	10.50 ***	小6・中2 > 高1・高2
	中2	11.99	2.88		
	高1	11.40	2.66		
	高2	11.63	2.60		
・ 最大値は16で、数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。					
下位項目	平均値		標準偏差	F値	有意差のある関係
メッセージのやり取りをなかなか終わらせられないことで悩んでいる。	小6	2.98	2.98	7.09 ***	小6・中2 > 高2
	中2	2.96	2.96		
	高1	2.83	2.83		
	高2	2.72	2.72		
自分が送信したメッセージに対する反応がないことで悩んでいる。	小6	3.11	3.11	5.55 **	小6・中2 > 高1・高2
	中2	3.15	0.83		
	高1	3.00	0.81		
	高2	2.94	0.79		
メッセージの送信後、「あの伝え方でよかったのだろうか」と悩んでいる。	小6	3.06	1.02	18.65 ***	小6・中2 > 高1・高2
	中2	2.96	0.97		
	高1	2.70	0.87		
	高2	2.64	0.87		
知らないところで自分のことについてメッセージをやり取りをしているのではないかと心配になる。	小6	3.12	1.08	18.65 **	小6 > 高1・高2
	中2	3.00	1.01		
	高1	2.91	0.94		
	高2	2.92	0.98		
とてもあてはまる=4 あてはまる=3 あまりあてはまらない=2 全くあてはまらない=1					
・ 各下位項目の最大値は4で、数値が高いほど「あてはまらない」、低いほど「あてはまる」回答を示す。					
・ F値は分散分析の検定統計値、***は0.1%の有意水準を示す。					

「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の観点は、SNSを利用する相手から嫌われないように過剰に気を遣っているため、自分の考えや気持ちを伝えられずにいたり、相手の気持ちや考えを確認できないために悩み苦しんでいる意識である。この意識が高いと、相手を不快にさせて自分が傷付くことがないように自分の気持ちや考えの自己開示をしなくなり、表面的な人間関係しかもてないという悩みを抱くようになる状態になることが推測される。

この観点は、4項目の下位項目から構成され、前述の「『即レス』の悩み・負担感」の観点と同じく、相手との良好な関係性を維持したいという思いがあるため、この意識が高いほど精神的に疲弊する状態になることが推測される。学年間の比較の結果、表2-10に示すように、高校1・2年生は「悩み・負担感を感じている」状態にある生徒が多いことが分かった。これらから、「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」を意識する児童生徒は、SNSでやり取りをする相手との関係性に悩み苦痛を感じている状態にあるため、自分の考えや気持ちを伝えられるように表現できるコミュニケーション力を高める指導・支援が必要であると考えられる。



イ SNSをよく利用する児童生徒の特徴

表2-11 SNSをよく利用する児童生徒とあまり利用しない児童生徒のSNS観点の平均値と比較分析の結果

■ SNSの利用状況が「毎日」, 「2時間以上」		該当する児童生徒		該当しない児童生徒		t 検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	小6	11.87 (15人)	2.99	13.72 (283人)	2.56	**
	中2	10.66 (47人)	2.59	13.17 (335人)	2.35	***
	高1	11.9 (82人)	1.95	12.62 (350人)	2.09	**
	高2	11.35 (96人)	2.11	13.03 (345人)	6.93	*
・ 最大値は16で, 数値が高いほど「気を付けている」状態, 低いほど「気を付けていない状態」であることを示す。						
「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	小6	2.93 (15人)	1.49	5.06 (283人)	1.99	***
	中2	3.89 (47人)	1.55	4.83 (335人)	1.80	***
	高1	4.02 (82人)	1.41	4.53 (350人)	1.60	**
	高2	4.23 (96人)	1.24	4.46 (345人)	1.43	
・ 最大値は8で, 数値が高いほど「気を付けている」状態であることを示す。						
「SNS利用のやり取り」の親和性	小6	5.47 (15人)	2.10	6.84 (283人)	2.63	*
	中2	5.51 (47人)	2.21	7.00 (335人)	2.30	***
	高1	5.96 (82人)	1.67	6.72 (350人)	1.98	**
	高2	6.04 (96人)	1.67	7.23 (345人)	1.67	***
・ 最大値は12で, 数値が高いほど「思わない」状態であることを示す。						
「即レス」の悩み・負担感	小6	4.13 (15人)	2.33	5.24 (283人)	2.79	
	中2	5.85 (47人)	2.18	5.45 (335人)	1.93	
	高1	5.67 (82人)	1.55	5.73 (350人)	1.52	
	高2	5.41 (96人)	1.57	5.72 (345人)	1.44	
・ 最大値は8で, 数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。						
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	小6	11.20 (15人)	2.91	12.24 (283人)	3.14	
	中2	12.47 (47人)	3.07	12.01 (335人)	2.80	
	高1	10.57 (82人)	2.88	11.66 (350人)	2.56	**
	高2	10.54 (96人)	2.74	11.32 (345人)	2.53	**
・ 最大値は16で, 数値が高いほど「あてはまらない」状態であることを示す。 ・ t 値は比較分析の検定統計値, *は5%水準, **は1%水準, ***は0.1%水準を示す。						

SNSをよく利用する児童生徒を, SNSを「毎日利用する」と「2時間以上利用する」と回答した児童生徒とし, この条件に該当しない児童生徒とSNS観点の平均値を統計処理 (t 検定) で比較分析をした結果, 表2-11に示すように各項目の値が低い特徴が見られることが明らかになった。この結果から, 「SNSをよく利用する」児童生徒の特徴を学年別にまとめる。

■ 小学6年生・中学2年生

- ・ 「『SNS をめぐるトラブル』への備えの意識」と「『SNS をめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」の平均値が有意に低いことから, トラブルに対する備えと対処の意識は共に低い特徴がある。
- ・ 「『SNS 利用のやり取り』の親和性」の平均値が有意に低いことから, 親和性の意識は高い特徴がある。



### ■ 高校1年生

- ・ 「『SNSをめぐるとらぶる』への備えの意識」と「『SNSをめぐるとらぶる』への発生後の対処の意識」の平均値が有意に低いことから、とらぶるに対する備えと対処の意識はともに低い特徴がある。
- ・ 「『SNS利用のやり取り』の親和性」の平均値が有意に低いことから、親和性の意識は高い特徴がある。
- ・ 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の平均値が有意に低いことから、関係性の悩み・負担感の意識は高い特徴がある。

### ■ 高校2年生

- ・ 「『SNSをめぐるとらぶる』への備えの意識」の平均値が有意に低いことから、とらぶるに対する備えの意識は低い特徴がある。
- ・ 「『SNS利用のやり取り』の親和性」の平均値が有意に低いことから、親和性の意識は高い特徴がある。
- ・ 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」の平均値が有意に低いことから、関係性の悩み・負担感の意識は高い特徴がある。

このような結果から、SNSをよく利用する児童生徒に見られる傾向をSNS観点別にまとめると、次のようなことが考察される。

#### □ 「『SNSをめぐるとらぶる』への備えの意識」

この観点の意識は、SNSをよく利用する児童生徒ほど低いため、SNSをよく利用する状態になるほど、とらぶるへの備えを意識しなくなることと関係している。

#### □ 「『SNSをめぐるとらぶる』への発生後の対処の意識」

この観点の意識は、SNSをよく利用する児童生徒ほど低いため、SNSをよく利用する状態になるほど、とらぶるが発生した後の対処を意識しなくなることと関係している。

#### □ 「『SNS利用のやり取り』の親和性」

この観点の意識は、SNSをよく利用する児童生徒ほど高いため、SNSをよく利用する状態になるほど、SNSの相手との親和性を意識するようになることと関係している。

#### □ 「『即レス』の悩み・負担感」

この観点の意識は、SNSをよく利用する児童生徒と他の児童生徒に意識の差がないため、SNSの利用状態と「即レス」に対する悩みや負担感は関係がない。

#### □ 「『やり取りをする相手との関係性』の悩み・負担感」

この観点の意識は、SNSをよく利用する児童生徒ほど高いため、SNSをよく利用する状態になるほど、SNSのやり取りをする相手との関係性に悩み・負担感を意識するようになることと関係している。

以上のことから、児童生徒はSNSをよく利用する状態になると、とらぶるの備えと対処の意識は低くなり、相手との親和性を意識するようになるが、SNSのやり取りをする相手との関係性に悩み・負担感を抱くようになることが明らかになった。

### 3 実態調査のまとめと考察

#### (1) 教師対象の実態調査について

- 教師対象の実態調査の結果からは、現在の児童生徒を「感情のコントロールができない、自己表現力が乏しい」、「新しい関係づくりを苦手にする、良好な関係でも本音を隠す」、「SNSのやり取りで友達関係に悩む、精神的に不安定になる」児童生徒が増えてたと捉えている教師が多いことが明らかになった。
- 児童生徒の友達関係づくりを促す取組状況については、「年間計画はない」と回答する教師が約4割の状況であることが明らかになった。

#### 【考察】

多くの教師は児童生徒の人間関係づくりの指導・支援の重要性を理解しているが、その取組については積極的な実践ができない状態があることから、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの必要性が明確になった。

#### (2) 児童生徒対象の実態調査について

##### ア SNSを利用しない児童生徒

- SNSを利用しない児童生徒は、SNSを利用する児童生徒が多くなると、友達との会話や活動に楽しさを感じなくなったり、クラスへの所属感が低くなったりして、孤独感や疎外感を抱くようになりやすいことが明らかになった。

#### 【考察】

SNS を利用しない児童生徒は、学級集団に対して疎外感をもち人間関係が希薄になりやすい。このことから、誰とでも分け隔てなく一緒に活動できる協調的行動力や、SNS を利用する友達とでも一緒に活動することができる適応的行動力を高める指導・支援をすることが特に必要であると考えられる。

##### イ SNSを利用する児童生徒

- SNSを利用する児童生徒は、SNSを利用する相手とは親しい関係を築き親和性を意識する傾向があるが、SNSの利用時間が増えると、相手を気遣ったやり取りをしなくなったり、メッセージの応答や関係性に悩んだり、負担感を抱きやすくなったりすることが明らかになった。

#### 【考察】

SNS を利用する児童生徒は、相手の立場を考えた利用をしなくなったり、対面で自分の気持ちや思いを伝える表現行動ができずに悩みやすくなったりする傾向がある、このことから、自分の考えや気持ちを率直に表現できる行動や、相手の伝えたいことを理解することを大切にできるコミュニケーション行動を高める指導・支援が特に必要である。